令和８年度（2026年度）全道スクールカウンセラー連絡協議会開催報告書
北海道教育委員会（令和８年８月）

１ 実施日
令和8年（2026年）8月7日（金） 9時40分～12時00分

２ 目　的
学校における効果的なカウンセリングの在り方等について、情報交換や研究協議を行い、児童生徒へのカウンセリングや教員・保護者への助言の充実に資する。

３ テーマ
今日的な課題を踏まえたスクールカウンセリング及びコンサルテーションの在り方について

４ 講　演
演題「Hyper Q-Uを活用した学級経営コンサルテーションの取り組み」
講師 北翔大学理事長・名誉教授　山　谷　敬三郎　氏

講演内容

〇 Hyper Q-Uを活用した学級経営コンサルテーション
・学級経営コンサルテーションにHyper Q-Uを活用する目的は、学級経営の基本的な取組や方法の理解を促すとともに、児童生徒の個別の悩みやいじめ等の問題、不適応等の早期発見につなげることである。
・「学校生活意欲の低さ」、「学級満足度における要支援群」、「学力と知能の差」、「前回からの承認感・被侵害感の変化」等を組み合わせて分析することで、登校渋りや学校生活上の不適応等の兆候を早期に把握することができる。
・スクールカウンセラー（以下、「SC」という。）が分析結果を活用する際は、「学級全体への支援」と「個別の関わりを要する児童生徒への支援」に分けて考えることが大切である。
・「学級全体への支援」は、その学級の長所を分析結果を用いて客観的に示すなど、「よいところを伸ばしていく」という視点でコンサルテーションを行うとよい。
・「個別の関わりを要する児童生徒への支援」については、「学校生活意欲」、「学級満足度」、「日常の行動」等の項目について、過去の結果を含めて回答を分析し、分析した情報を学級担任と共有した上で個別面談等を行うとよい。

〇 学級経営における「ルール・マナーの遵守」と「リレーション形成」
・子どもたちが安心して学校生活を送るための学級経営の基本的な視点は、「ルール・マナーの遵守（学級全体として規律を守ること）」、「リレーション形成（本音や感情を交流できる関係づくり）」の2点である。
・この2点のどちらを優先して働きかけるかについては、学級の実態に応じて検討することが大切であり、検討に当たっては、学級集団の状態を把握するためのアセスメント資料としてHyper Q-Uの結果を活用することが有効である。

〇 心理の専門家としての学校への支援の在り方
・SCは個別の相談だけを行うのではなく、Hyper Q-U等のツールを活用し、学校全体・学級全体のアセスメントや教員へのコンサルテーションにも専門性を発揮することで、学校における支援の一層の充実につながる。
・具体的な取組として、例えば、SCによるコンサルテーションや校内研修の場面において、客観的データから得られる学級・学校のよさや課題について付箋等で可視化し、教職員間で課題の解決の見通しを共有することで、学校が主体的に児童生徒への支援に向かうことができるようにすることなどが考えられる。

５ 協　議
協議テーマ　スクールカウンセリング及びコンサルテーションの実際について

（1）本日の講演で得た新たな視点や気付きを踏まえ、今後の実践に活かしたいこと
・学級満足度尺度による集団把握についての説明が大変分かりやすく、学校への助言の方向性が明確になった。
・学校からは児童生徒の個別の支援についての依頼が多いが、中には学級全体を見てほしいという依頼もあるため、今後は「ルール・マナーの遵守」と「リレーション形成」の視点を意識しながら学級担任への助言等を行いたい。
・教職員へのコンサルテーションについて、教職員個人のみならず教職員集団へのアプローチも重要であることを学んだ。Hyper Q-U等のアセスメントツールを活用するなど、学校の実態に応じた支援を行いたいと感じた。
・客観的なデータと観察・面談から得た情報を組み合わせ、児童生徒や学級集団の人間関係を多角的に把握することが大切であることを学んだ。
・コンサルテーションに当たっては、課題の指摘に終始せず、児童生徒の頑張りや学級全体の強みなどを伸ばしていく声かけを実践したい。
・Hyper Q-Uに限らず、学校で実施している各種アセスメントや調査等について、結果に対する分析を十分に行っていない学校も見られることから、SCが分析や見立てをサポートすることで、効果的な取組につながると感じた。

（2）その他（これまでの経験や課題、今後の連携体制など）

・SCとして「子どもの関係性」や「学級で居心地のよさを感じているか」などを俯瞰的に見取りたいが、月に一度の訪問では情報を十分に得ることが難しいため、Hyper Q-U等のデータを参考にすることの意義は大きい。

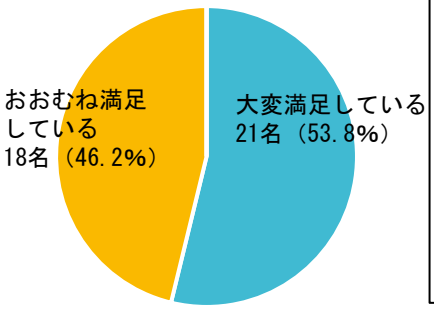
・教職員との関わりが十分でない状況では、学級経営に関してSC側から学級担任に積極的に介入することは難しいが、客観的データの情報共有をきっかけにすることで学級担任との話が進めやすくなる。

・学校で実施されている各種調査データがSCに提供されない現状も見られることから、児童生徒への組織的な支援を行うためには、まずは学校とSCの双方が互いの役割や必要な情報を共有することが大切だと考える。

・地域のSC同士が対面で横のつながり・事例共有をするなど、継続した支援や事例の引継ぎができるような機会を充実させてほしい。

6 アンケート結果（n=39、選択式の質問項目には4段階で回答）

【１】本連絡協議会の内容



※あまり満足していない、満足していない：各０名（0.0%）

【1】の回答理由（自由記述）

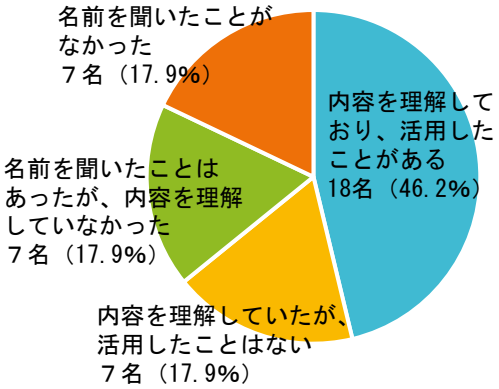
○　SCとしての経験が少ないため、協議を通して様々な事例を聞くことができてよかった。Hyper Q-Uを活用する視点で、今後の相談業務に携わりたい。

○　講演では学級経営について多くの視点や気付きを得ることができた。また、協議では他の参加者の話からSCの現状を知ることができ、よい機会となった。

○　個別の案件に関わることが多いカウンセラーの方と、「学級という集団の視点で子どもたちを見つめる感覚」を共有できたことが大変貴重だった。

○　他のカウンセラーの方から「問題ないように見える子どもでも、学級の状況と併せて見ると、もしかしたら苦しんでいるのかもと思えた」という意見があり、多面的に子どもを見つめる大きなきっかけになった。

【２】本連絡協議会を開催する前の「Hyper Q-U」の理解度や活用の有無



【2】～【4】を踏まえた成果と課題

＜参加者の回答（自由記述）＞（○：成果、●：課題）

○生徒数の減少により学校規模が縮小していく中で、学級の在り方を捉えた適切な対応が一層求められることを改めて感じることができた。

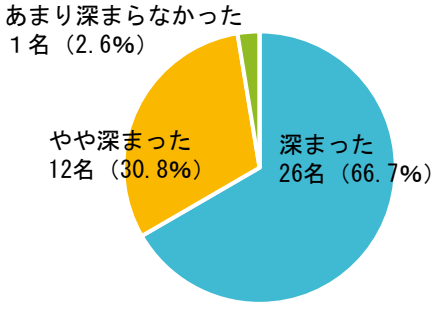
○学校職員は日常的に子どもと関わっているため、どうしても主観的になりがちだが、外部の専門家が客観的に学級を分析することで、学校だけでは気付けなかった視点で教育活動を進めることができる。

○Hyper Q-U等の客観的なアセスメントを活用して学級や児童生徒の状況を可視化することで、児童生徒への理解が一層深まり、先生、学校、学級、児童生徒が変わるための手がかりにもなる。

●学校のニーズによってSCに求められる役割は異なるが、SCの役割に「学級経営のコンサルテーション」があることについて、理解が十分でない学校もある。

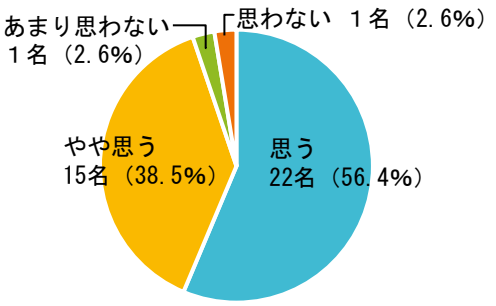
●分析結果から学級担任が責任を感じたり、他の教職員から批判されたりしないよう、学校・教職員に対して「学級をアセスメントすることのよさ」を周知する必要がある。

【３】学級経営コンサルテーションについての理解



※深まらなかった：０名（0.0%）

【４】学級経営コンサルテーションに「Hyper Q-U」を活用したいと思うか



道教委策定の「スクールカウンセラーガイドライン」を御活用ください。

https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ssa/sido_siryo_sc.html